



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	聴覚障害児における文章理解の特徴と課題に関する文献的考察：読書力診断検査の分析と非連続型テキストを中心に(fulltext)
Author(s)	中田,文菜; 澤,隆史
Citation	東京学芸大学紀要. 総合教育科学系, 67(2): 165-172
Issue Date	2016-02-29
URL	http://hdl.handle.net/2309/144669
Publisher	東京学芸大学学術情報委員会
Rights	

聴覚障害児における文章理解の特徴と課題に関する文献的考察：

読書力診断検査の分析と非連続型テキストを中心に

中 田 文 菜^{*1}・澤 隆 史^{*2}

発達障害学分野

(2015年9月15日受理)

1. 研究の背景と目的

読解とは、文章を読み、その内容を理解するという知的作業であり、あらゆる学習に共通に必要とされる基礎的な能力である（中村，2000）。聴覚障害児にとっても読み能力の向上は、これまでの聴覚障害教育における重要な課題の一つとされている。長南（2006）によると、読書力診断検査における聴覚障害児の読書学年は、小学部3年生頃から聴児より遅れはじめ、5、6年生から中学部にかけて緩やかに向上するものの、高等部段階で再び横ばいになることが示されており、聴覚障害児の読書力の発達は、小学部高学年以降にその課題が顕著になることが指摘されている（長南・澤，2007）。

聴覚障害児の読解力についてのこれまでの研究は、物語文や説明文などの連続型テキスト（文と段落から構成され、物語、解説、記述、議論・説得、指示、文章または記録などに分類できるテキストの形式を指す。）を対象にしたものが中心であった。一方、近年ではOECD（経済協力開発機構）が実施しているPISA型の読解力問題に代表されるように、図、グラフ、表・マトリックス、ダイアグラム、地図、記入用書式などの文章以外の形式を含めた非連続型テキストの読み能力が注目されており（岸・中村・相澤，2011）、国語教育の分野でもその指導方法が検討されている（岸・中村・亀井，2013）。2009年に改訂された教研式全国標準リーディングテストの読解力テストにおいても、表と提示文を組み合わせた非連続型テキストの問題が含まれるなど、読解力を評価するための

題材として重視されている。インターネット上の情報や新聞、雑誌、掲示物など日常生活においては非連続型テキストに接する機会が数多く存在する。しかし、聴覚障害児を対象とした非連続型テキストの研究はほとんどなされていない状況である。

本研究では、読書力診断検査やその他の読解力テストを対象とした先行研究から聴覚障害児の読みの力（読解力）の実態を概観し、特に「非連続型テキストの読解」という観点から今後の研究課題について検討することを目的とする。

2. 聴覚障害児の文や文章の理解能力における課題

聴覚に障害があるということは、単に音のきこえにくさだけではなく、音声の受容・表出に困難があることから、日本語能力の発達に影響を及ぼし（我妻，2000a）、特に読みの能力における遅滞が大きいといわれている（井原・草薙・都築，1982）。

聴覚障害児の読みにおける主な課題として中屋・川合（2013）は、①濁音や促音の誤読等の読字に関する課題、②助詞の誤った使用、受け身文や使役文、やりもらい文が分からない等の文法に関する課題、③文章から正しく情報を読み取ることができない、事柄の順序や場面の様子、登場人物の心情の理解が難しい等の読解に関する課題を挙げている。また、文理解の方略として、文中の最初に出てくる有生名詞を動作者、次に出てくる有生名詞をその動作を受ける者と解釈する「語順方略」や、「が名詞句」を動作者、「に名詞句」や「を名詞句」を、動作を受ける者と一律に解釈する

*1 東京学芸大学大学院 教育学研究科

*2 東京学芸大学 特別支援科学講座 発達障害学分野（184-8501 小金井市貫井北町4-1-1）

「助詞方略」を用いて文を理解する聴覚障害児が存在する。また、聴覚障害児は複文を読む際に、左から順に単文のように区切って解釈し(我妻, 2000a), その上で文中の単語の意味を手掛かりに「単語読み」的に文を理解する傾向や(草薙・都築・板橋, 1978), 自分の経験を手がかりに文を解釈する傾向が強く(清木・菅原・今井, 1978), 自分が経験したことの無い内容やイメージ化が困難な内容の文章を理解することが難しいことを報告している(我妻, 2000a)。

聴覚障害児の文脈理解については、岡田らによるクローズ法を用いた研究がある(岡田, 1980; 岡田・高橋・都築・保坂, 1980; 岡田・緒方, 1983; 岡田, 1984)。クローズ法とは、一定の客観的で明確な処理により、文章から単語を削除し、それに適切な語で充足させる方法である。従来から、クローズ法は可読性と理解の測度として英語等の読みの研究にも利用されている。岡田ら(1980)は、聴覚障害児は学年が進行しても、読みにおいて文脈的制約の影響が顕著にみられず、聴覚障害児は、文脈情報を利用する上で語彙、文型などに関する基礎的言語能力が不足していることが指摘している。

3. 読書力診断検査による聴覚障害児の読み能力についての研究

3. 1 聴覚障害児の読解力について

聴覚障害児の読み能力を評価する方法として、読書力診断検査(Reading-Test)がしばしば使用されている。読書力診断検査等の標準検査は簡便に使用でき、評価の信頼性が高いため、有効な評価手段である(澤・吉野・今井, 1995)。読書力診断検査の一つである教研式全国標準リーディングテストでは、小学1・2年生、小学3・4年生、小学5・6年生、中学1～3年生をそれぞれ対象としたテストが構成されており、「読字力」、「語彙力」、「文法力」、「読解力」の各下位テストによって、小問別の反応分析等の詳細な評価が可能であり、聴覚障害を主たる対象とする特別支援学校(以下、聾学校)における、言語指導に際してのアセスメントとして広く利用されている。特に、読解力テストはその問題の性質上、「読字力」、「語彙力」、「文法力」を総合した力を反映していると考えられ、読み能力を総合的に評価する指標として活用されている(中村, 1995)。

これまでに読書力診断検査を用いて聴覚障害児の読書力を評価・分析した研究は数多くあるが(中野・佐藤, 1971; 我妻, 1983; 堀内・田中, 1986; 長南・

澤, 2007), 平均的に聴覚障害児の読書力は聴児の小学4～5年生のレベルに留まっている状況であり(我妻, 1983), 30～40年前に実施された研究結果と比較した際、現状においてもこの状況が顕著に改善されたとは言い難い(白石・澤, 2015)。また長南・澤(2007)は、高等部段階になっても聴覚障害児は聴児の小学生よりも読書力が劣り、また小学部高学年以降、学年の進行によって読書力の変化が見られないことが指摘している。このような読書力や読解力の発達における困難には種々の認知能力や言語能力が関与することが多くの研究から報告・考察されている。

長南(2003)は、読解力を構成する下位能力として、①語彙力、文法力、②作動記憶容量、③既有知識、④推論の能力、⑤メタ認知能力を挙げ、これらの各能力が聴覚障害児に及ぼす影響等について考察している。また、語彙力、文法力については、個人差が極めて大きいものの、特に読解テストの得点が、聴覚障害者の中でも平均以下のものは、語彙力、文法力の得点も低いことが報告されている(Witsken, 2001)。さらに、中村(2000)は、リーディングスパンテストによって測定した作動記憶容量が聴者と同様に聴覚障害児・者にとっても読解力の個人差を表す指標であると仮定し、日本語を用いたリーディングスパンテストの成績が聴者と比べて低いことから、聴覚障害児・者の作動記憶容量が読解力に有意に影響することを報告している。また、井坂・我妻・星名(1994)は、聴覚障害児の概念獲得は年齢が進むとともに上位概念の獲得が困難となり、聴児との違いが大きくなることを指摘している。都築(1981)や田村・都築・上野(1983)の研究では、推論能力の一つの枠組みである論理的思考能力が、聴者と比較した場合劣り、論理的操作が複雑になると特にその傾向が顕著になることを報告している。メタ認知能力について、長南(2003)はKelly et al. (2001)の研究から、読みの得点の高い聴覚障害者は、様々なストラテジーを用いており、また読みの得点の低い聴覚障害者が用いるストラテジーが異なることを指摘している。

聴覚障害児の比喩文理解の研究として澤・吉野(1995)は、比喩文理解と読みの能力の関連を検討した。その結果、比喩文の理解は「読書力」と有意な相関をもち、また、読書力テストにおける下位テストの中でも「読解」との相関が最も強いことを見出した。澤・吉野(1995)は、読書力テストの下位検査における読解力テストは、与えられた文章の文脈を読み取り、文章中の空欄に適切な単語や表現を埋めていくテストであり、その解答のためには、文脈と単語の意味との

関係を吟味することが要求されることから、単語の内包的意味の知識を駆使した意味の柔軟な解釈が要求され、比喩の理解と密接な関連を持つと推察している。

このように聴覚障害児の各下位能力の実態は聴児に比べ劣っており（長南，2003）、また読解力と密接な関連を持つ比喩文の理解についても困難さが指摘されている（澤・吉野，1995）。

3. 2 聴覚障害児にみられる読書力診断検査における誤答の傾向

我妻（1983）は、聴覚児障害児を対象に行った読書力診断検査における読解力テストの誤答を分析し、①問題文中の単語を選ぶ、②問題文の前後関係を無視した誤反応をする、③全く誤りではないが適切ではない語句を選ぶ、等の傾向を指摘している。

堀内・田中（1986）の経年的観察研究では、通級制難聴学級に在籍する小学3年生から中学3年生までの児童22名を対象に、継続して3年以上読書力検査を実施した。その結果、上位群（初回の読書力検査の偏差値が50以上の6名）と下位群（偏差値が39以下の7名）に共通して読速度、読字力の成績に比べ、語彙力、文法力、読解力の成績が低いという傾向が見られた。堀内・田中（1986）は、聴覚障害児の読書力の問題点を、語彙の不足、文法力の不完全さに起因する読解力の低下であることを指摘しており、就学後の児童に対して、これらの点の養成に努力する必要があると述べている。

脇中（2014）は、読書力診断検査の誤答について分析し、漢字や目に見えるものにとらわれた解釈や内面より外面や結果にとらわれた解釈が多い傾向、最初の部分や位置的に近い部分から解答を探す傾向が強いことを示唆しており、視覚優位型や同時処理型という認知特性が聴覚障害児の読みと関連性することを指摘した。この脇中（2014）の指摘は、文字記号がもつ視覚的特徴の類似性を主な手がかりとして、その一致項目の探索を心理作業の中心とするという、視覚一致方略（visual matching test-taking strategy）の使用を示唆するものといえる。L_ASASSO（1985）は視覚一致方略について、対象とした聴覚障害児の85%が少なくとも1回以上この方略を用い、誤りの40%以上がこの方略の使用によることを示している。

4. 読書力診断検査以外の読解力テストによる聴覚障害児の読み能力に関する研究

聴覚障害児を対象に読書力診断検査を実施する際、

生活年齢に応じた検査版が用いられるために、判定される読書学年の下限の上昇を達成段階と判定される等、本来の読み能力の発達と捉えるべきか不明な点も少なくない。また選択式であることから、憶測により正答する可能性や、読みにおける困難さの分析が行いにくいなどの問題点が、小淵・廣田（2007）により指摘されている。澤・吉野・今井（1995）も、検査に用いられる課題文の不自然さや短さ等、課題材料に作為性が強いこと、また、客観性を高めるために多肢選択法のテスト形式をとっているため、誤りの質的分析がやりにくいことを指摘している。さらに脇中（2013）は、聾学校高等部の生徒を対象に全国標準教研式読書力診断検査A形式の小学校高学年用と中学校用の両方を実施した結果から、前者と後方で診断される読書学年に相当のずれがあることを指摘している。

読書力診断検査以外に、聴覚障害児の読解力を評価した研究に小淵・廣田（2007）がある。聴覚障害児18名を対象に学年標準的な記述式の読解力課題を実施したところ、4年生以上において遅れが顕著となることが示された。記述式課題による誤答の内容を分析したところ、聴覚障害児が誤答した問題では、記述式の解答内容について、本文や問の解釈の誤り、助詞や助動詞の使用の誤り、内容を要約せず答えを含む全文をそのまま抜き出すなどの特徴的な記述が見られた（小淵・廣田，2007）。また分析の結果、読解力は言語力、構文力、読みの作動記憶要因（大越・澤，2004）と高い相関を示しており、聴覚障害児において複雑な構文力の獲得不足が読解力の遅れにつながっていることが示唆された（小淵・廣田，2007）。

澤・吉野・今井（1995）は、より日常的な文章の理解について検討するために、小学生新聞の文章を題材とした読解力テストを作成し、健常児の小学生4・5・6年生103名と、聾学校に在籍する中学部・高等部の生徒184名を対象に実施した。その結果、聴覚障害児の読解力は高等部3年生でも健常児の5年生レベルにとどまるという結果であった。澤ら（1995）は、聴覚障害児の誤りとして、設問の要求を的確に理解していないこと、解答の記述における文法的誤りが多いこと、語句の意味についての理解が不十分なこと、比喩の理解が困難であることを指摘している。

深江（2009）は、ある物語文の一場面における事実レベルと推論レベルの理解の発達の傾向と、両レベルの理解の関連性について検討した。その結果、年齢相応の言語発達を示す聴覚障害児は、学年の上昇に伴う推論レベルの理解が向上することが示唆された。さらに、事実レベルの理解と推論レベルの理解との間に直

接的な関連はみられず、事実レベルの理解は比較的早い段階で可能になるものの、それによって推論レベルの理解が可能になるとは限らないことを示し、推論レベルの理解には言語力だけでなく経験による知識などが必要であることを考察している。

5. 非連続型テキストに関する研究

非連続型テキストとは、データを視覚的に表現した図・グラフ、表・マトリックス、ダイアグラム、地図、記入用書式など、文章以外の形式で書かれた情報のことである(OECD, 2003; 国立教育政策研究所, 2004)。それに対し連続型テキストとは、文と段落から構成された、物語、解説、記述、議論、説得、指示、文書または記録などを指す(国立教育政策研究所, 2009)。2000年より、OECDによって3年ごとにPISA(生徒の学習到達度調査)が実施されており、義務教育終了段階において読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーの3分野の調査が行われている。なお、ここでの読解力は、「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力(国立教育政策研究所, 2002)」と定義されている。

読書力診断検査における教研式全国標準リーディングテストの読解力テストのうち非連続型テキストの読解テストを例に、その問題構成を考察する。非連続型テキストの読解テストは、字義問題と推論問題の2つから構成されていると考えられる。字義問題とは、提示文(非連続型テキストまたは、混成型テキスト)、から答えとなる事実を読み取る問題である。一方推論問題とは、提示文から得られる複数の情報を組み合わせて答えを推論する問題である。字義問題と推論問題ともに、正しく解答するためには提示文からの情報を参照することが必要となるが、特に、非連続型テキストにおける推論問題では、提示文と問題文の両方の内容理解に加え、さらに必要な情報が書かれている箇所を参照して、新しい情報を導き出す力が必要とされる。連続型テキストの読解テストとは情報提示の仕方が異なるため、非連続型テキストはそれ特有の読解の方略を持つことが推察される。

OECDによるPISAの読解力テストにおいて「非連続型テキスト」が注目される以前に、教育心理学・認知心理学の分野で、文章理解における図表やイラストの効果を研究がなされてきた(岩槻, 2003; Mayer, 2001)。岸・中村・相澤(2011)は、非連続型テキス

トの理解の可否が大きく影響する説明文において、文章との間で情報を相互に補完する機能を持つグラフ、表、図(イラスト・模式図・概念図)などが重要であるとしている。図解は文章理解を促進する上で様々な役割を果たすと考えられており(鈴木・栗津, 2006)、連続型テキストと比べて、相互に関連のある文字情報が明示的に提示された空間的属性を持つ図表は、情報を容易に得られる(Larkin & Simon, 1987; 鈴木・栗津, 2006)。また、鈴木・栗津(2006)は、文章理解を促進する要因として、空間配置によって情報が提示されること、文字情報と図的要素全体が関連づけられることの重要性を指摘した。非連続型テキストの読解について岸ら(2009, 2011, 2013, 2014)は一連の研究から、図表や文の読み特徴や効果などについて検討している。

中村・岸(2009)は、非連続型テキストを含む文章の読み過程として、「文章中心群」と「全体読み群」があることを明らかにし、さらに文章中心群に比べ、全体読み群の理解得点が高いことを見出した。また、材料を提示した際に、最初に注視した場所によって、本文を読む前に図表を見た「図表先行型」と、図表を見ずに本文を読み始めた「本文先行型」とに学習者を分類した。「図表先行型」の学習者の理解度テストの得点が、「本文先行型」の学習者より高く、また「本文先行型」の学習者に対して、まず図表を見るように指示したところ、内容の理解が促進されたという結果が示された(岸・中村・相澤, 2011)。また、非連続型テキストを含む説明的文書の読解における作業記憶容量の影響について検討した岸・中村・亀井(2013)は、歴史の呈示教科書において作業記憶容量が大きい学習者はテキストの読み始めから図表を注視するとともに、文章部分を読み終えるまでの間も図表をかなり注視していたことを明らかにした。

中村・岸(2014)の研究では、小学3年生を対象とした非連続型テキストを含む文書の読解の様相をまとめており、児童の読み方として、主に2つのパターンを見出した。まず、インパクトのある挿絵や大きな図を注視し、その後本文、関連した図の参照を繰り返し、直接関連しない残りの図表をまとめて参照するパターンと、もう1つは、インパクトのある挿絵や大きな図を注視し、その後本文、関連した図の参照を繰り返し、サイズの小さな図表は参照しないパターンである。両パターンとも、最初にキャラクターの挿絵やサイズの大きな図を参照し、その後本文を読み進めていた点が共通しており、小学3年生では、その読解が非連続型テキストのサイズやレイアウトに大きく影響さ

れることを示唆した。

このように聴児を対象とした研究において、非連続型テキストを含む説明的文書の読みの過程や、特徴について明らかにされ始めている。一方で、教育現場において、非連続型テキストあるいは混成型テキストの読解力を向上させる指導の必要性が唱えられており(福屋・森田, 2013), 今後、聴覚障害児・生徒の教育現場においても課題となることが予想される。

6. 考察 —今後の研究課題—

読書力診断検査(Reading-Test)や、その他の読解力テストに関する先行研究から、聴覚障害児の文章理解における誤答の傾向、認知側面的な特徴について展望した。今後の研究課題として以下の二点が挙げられるだろう。

(1) 非連続型テキスト及び混成型テキストにおける、聴覚障害児の読みの特徴

中田・澤(2015)は、非連続型テキスト課題の困難度は参照点の数に伴う推論の有無によって異なること、また参照する情報が配置されている場所が関連していることを指摘している。しかし、聴覚障害児を対象とした非連続型テキストにおける読みの特徴についての研究は端緒についたばかりである。これまでの連続型テキストについての先行研究で明らかにされてきたように、聴覚障害児の読みの特徴が、非連続型テキスト課題、及び混成型テキスト課題においても同様の結果が得られるのか詳細に検討・分析する必要がある。

(2) 非連続型テキスト及び混成型テキストにおける、効果的な指導方法、及び聴覚障害児の読解力を促進するための手立て

現在、聾学校に在籍する児童・生徒は少人数化、重度化、重複化が進んでおり、このような児童・生徒に対する指導の在り方が課題になっている。聴覚障害児の文章理解能力に関する研究において、文理解能力の獲得やその指導法について、より個に即した研究方略が要求されることが考えられる(我妻, 2000b)。また、健常児を対象とした研究において、非連続型テキスト及び混成型テキストの読解力の向上が求められており(福屋・森田, 2013), これは聴覚障害児教育においても例外ではなく、非連続型テキスト及び混成型テキストの構成や、聴覚障害児の読解の特徴を明らかにした上で、その読解力を向上させる効果的な指導法の検討が必要であろう。

文献

- 1) 我妻敏博(1983) 聴覚障害児の「読み」の能力. 国立特殊教育総合研究所報告書手法の評価と適応に関する研究, 61-66.
- 2) 我妻敏博(2000a) 聴覚障害児の言語力の問題点. 電子情報通信学会技術研究報告. TL, 思考と言語, 100 (480), 47-52.
- 3) 我妻敏博(2000b) 聴覚障害児の文章理解に関する研究の動向. 特殊教育学研究, 38 (1), 85-90.
- 4) 長南浩人(2003) 聴覚障害児の読解力を向上させるためのコミュニケーションのあり方 —認知心理学の視点から—. ろう教育科学, 45 (3), 167-176.
- 5) 長南浩人(2006) 中学部生徒の言語力 —読書力診断検査の結果から—. 聴覚障害, 668, 4-12.
- 6) 長南浩人・澤隆史(2007) 読書力診断検査に見られる聾学校生徒の読書力の発達. ろう教育科学 —聴覚障害児教育とその関連領域—, 49 (1), 1-10.
- 7) 深江健司(2009) 聴覚障害児の文章理解の特徴に関する研究 —事実レベルと推論レベルの理解とその関連性の検討—. 特殊教育学研究, 47 (4), 245-253.
- 8) 福屋いずみ・森田愛子(2013) 非連続型テキストを含む説明文研究の現在. 広島大学心理学研究第13号.
- 9) 堀内美智子・田中美郷(1986) 難聴学級児童の言語力の経年的観察(1) —読書力の経年的変化—. 音声言語医学, 27: 223-228.
- 10) 井原栄二・草薙進郎・都築繁幸(1982) 聴覚障害児の語い・読み・作文指導. 明治図書
- 11) 井坂行男・我妻敏博・星名信昭(1994) 聾学校児童生徒の「生き物」に関する概念の階層構造の獲得について(その1). ろう教育科学, 36 (1), 15-35.
- 12) 岩槻恵子(2003) 知識獲得としての文章理解. 風間書房.
- 13) 岸学・中村光伴・相澤はるか(2011) 非連続型テキストを含む説明文の読解を促進するには? —眼球運動測定による検討—. 東京学芸大学紀要総合教育科学系 I, 62, 177-188.
- 14) 岸学・中村光伴・亀井裕(2013) 非連続型テキストを含む説明的文書の読解における作業記憶容量の影響. 東京学芸大学紀要, 総合教育科学系, 64, 225-232.
- 15) 草薙進郎・都築繁幸・板橋安人(1978) 聴覚障害児の文理解に関する研究 —単語の連想関係と syntax を中心にして—. 日本特殊教育学会第16回大会発表論文集, 46-47.
- 16) Larkin, J. H., & Simon, H. A. (1987). Why a diagram is (sometimes) worth ten thousand words. *Cognitive Science*, 11, 65-100.
- 17) LaSASSO, C. (1985) Visual matching test-taking strategies

- used by deaf Readers. Journal of Speech and Hearing Research, 28, 2-7.
- 18) Mayer, R. E. (2001) *Multimedia Learning*. Cambridge University Press.
- 19) 中村真理 (1995) 聴覚障害児における読書力診断検査に基づく言語指導法の検討. 東京成徳大学研究紀要第2号, 119-129.
- 20) 中村真理 (2000) 聴覚障害児の文章読解力 (3) —リーディングスパンとの関係—. 東京成徳大学研究紀要第7号, 91-98.
- 21) 中村光伴・岸学 (2009) 非連続型テキストを含む文章の読解過程 —眼球運動を指標として—. 熊本学園大学論集「総合科学」, 15, 2, 23-37.
- 22) 中村光伴・岸学 (2014) 非連続型テキストを含む文書の読解の様相 —小学3年生について—. 教心第56回総会, 815.
- 23) 中野善達・佐藤泰正 (1971) 聴覚障害児の読書力 (2). 日本特殊教育学会第9回大会発表論文集, 33-34.
- 24) 中田文菜・澤隆史 (2015) 聴覚障害児における非連続型テキスト課題の読解に関する研究.
- 25) 中屋史織・川合紀宗 (2013) 聴覚障害児の読み能力に関する研究と今後の展望 —学習障害児の読み困難と共通性の考察から—. ろう教育科学, 54 (4), 147-162.
- 26) 小淵千絵・廣田栄子 (2007) 聴覚障害児の読解力と関連要因に関する検討. *Audiology Japan* Vol. 50, No. 5
- 27) 大越麻貴・澤隆史 (2004) 聴覚障害児の読み能力と作動記憶容量 —遂行成績間の関連性分析から—. 日本特殊教育学会第42回大会発表論文集, 370.
- 28) 岡田明 (1980) 聴覚障害児の読みに及ぼす文脈の影響 (その3). 日本特殊教育学会第18回大会発表論文集, 212-213.
- 29) 岡田明 (1984) 聴覚障害児の読みに及ぼす文脈の影響 (その5). *心身障害学研究*, 8 (2), 1-12.
- 30) 岡田明・緒方佐千子 (1983) 聴覚障害児の読みに及ぼす文脈の影響 (その4). *心身障害学研究*, 7 (1), 11-19.
- 31) 岡田明・高橋信雄・都築繁幸・保坂真理 (1980) 聴覚障害児の読みに及ぼす文脈の影響. *特殊教育学研究*, 17 (3), 1-8.
- 32) 澤隆史・吉野公喜 (1995) 聴覚障害児の比喩文理解と読みの能力. ろう教育科学, 37 (3), 119-132.
- 33) 澤隆史・吉野公喜・今井秀雄 (1995) 聴覚障害児の読解力について —小学生新聞を題材としたテストの結果から—. ろう教育科学, 36 (4), 157-170.
- 34) 清水隆・菅原廣一・今井秀雄 (1978) 聴覚障害児の言語能力の検討. 日本特殊教育学会第16回大会発表論文集, 58-59.
- 35) 白石健人・澤隆史 (2015) 聴覚障害児における文章の読みに関する文献的研究. 東京学芸大学紀要総合教育科学系Ⅱ, 66 : 231-238.
- 36) 鈴木明夫・粟津俊二 (2006) 文章理解を促進する図解についての認知心理学的研究. *城西人文研究*, 29, 51-67.
- 37) 田村睦子・都築繁幸・上野益雄 (1983) 聴覚障害児の命題理解と論理的操作能力との関係について. *聴覚障害*, 38 (3), 4-15.
- 38) 都築繁幸 (1981) 聴覚障害児の条件文理解について. *聴覚障害*, 35 (9), 4-11.
- 39) 脇中起余子 (2013) A聾学校高等部における読書力診断検査の結果 (1) —小学校高学年用と中学校用の結果の比較—. ろう教育科学, 55 (2), 45-57.
- 40) 脇中起余子 (2014) A聾学校高等部における読書力診断検査の結果 (2) —聴覚障害生徒に多い誤答傾向の分析—. ろう教育科学, 55 (3), 95-107.

聴覚障害児における文章理解の特徴と課題に関する文献的考察：

読書力診断検査の分析と非連続型テキストを中心に

Feature and problem of text comprehension of Japanese Children with Hearing Impairments: A Review

中 田 文 菜^{*1}・澤 隆 史^{*2}

Ayana NAKATA and Takashi SAWA

発達障害学分野

Abstract

The purpose of this research was to have an overview of reality of reading ability in children with hearing impairments from the previous studies which administered the Reading-Test and other comprehension tests and to make a study about much further research from a viewpoint of “reading skill of non-continuous type text”. It can be pointed out that the reading ability of children with hearing impairments stays at 4-5th grade of hearing children, and the lack of primary language ability, for example, the lack of the vocabulary and grammatical competence.

In the research of comprehension of expository documents which include non-continuous text, the process of comprehension was classified into 4 patterns ; “Type of prioritizing text”, “Type of prioritizing diagram”, and “Group of only text”, “Group of whole reading” . Moreover, the research intended to improve the reading comprehension of non-continuous text and the mixture type text for hearing children is requested. In a similar way on education for children with hearing impairments, we needed to study about the comprehension of text and effective methods of teaching to improve their reading ability.

Keywords: deaf children, reading ability, text comprehension, non-continuous text

Department of Developmental Disabilities, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

*1 Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University

*2 Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)

要旨： 本研究は、読書力診断検査やその他の読解テストを対象とした先行研究から聴覚障害児の読みの力の実態や課題について概観し、特に「非連続型テキストの読解」という観点から今後の研究課題について検討することを目的とする。聴覚障害児の読み能力は、聴児の小学4～5年生のレベルに留まっており、語彙の不足、文法力の不完全さ等、聴覚障害児の基礎的言語能力の不足が指摘できる。非連続型テキストを含む説明的文書の読みの研究においては、「本文先行型」、「図表先行型」、また、「本文中心群」、「全体読み群」に分類される等、非連続型テキストを含む文章の読みのプロセスが明らかにされ始めている。また、聴児を対象とした研究において、非連続型テキスト及び混成型テキストの読解力の向上が求められており、これは聴覚障害児教育においても例外ではなく、非連続型テキスト及び混成型テキストの構成や、聴覚障害児の読解の特徴を明らかにした上で、その読解力を向上させる効果的な指導法の検討が求められるであろう。

キーワード： 聴覚障害児、読み能力、文章理解、非連続型テキスト